

令和三年荒魂之會六月例会資料

日時・六月十九日（土） 午後一時から午後三時迄
會場 秋葉原驛前茶房
祭禮 霞ヶ浦・わかさぎ漁解禁
出來事 初めて年號制定（大化元年）
人物生誕 白河天皇 人物忌日 酒井田柿右衛門

六月の回顧（七名）			
小野 益美氏	昭和六十一年	六月 二十日	三十五回忌
木ノ下 甫氏	平成 三年	六月 十三日	三十回忌
黒岩 一郎氏	平成 七年	六月 七日	二十六回忌
小田村寅二郎氏	平成 十一年	六月 四日	二十二回忌
阿部 正路氏	平成 十三年	六月 二十七日	二十回忌
中村 繁氏	平成二十二年	六月 二十三日	十一回忌
谷 加代子刀自	平成二十八年	六月 二十二日	四回忌

内容

研究會 午後一時から午後三時迄

- （一）『春雨物語』上田秋成著 報告者 竹内
- （二）萬葉集輪讀
- （三）日本書紀輪讀
- （四）偉人暦

八月（詳細未定）

研究課題 『椿説・弓張月』瀧澤馬琴著 報告者 竹内

九月（詳細未定）

研究課題 『日本永代藏』井原西鶴著

春雨物語

讀本。上田秋成著。文化五年（一八〇八）成立。江戸時代には刊行されず、寫本で傳はる。「血かたびら」「天津をとめ」「海賊」など古典知識をもとにした短編が多いが、「捨石丸」「樊かい」などの異色作もあり、全十篇から成る。最晩年の秋成の史觀・藝術觀・人間觀観などを個性的に提示した思想小説的側面を持ち、枯淡な中にすぐれた形象性を示してゐる。

中心となるもの

いづれの篇でも中心となるのは「命祿」とは何かといふ問ひである。この「命祿」は、秋成の「不遇」を通して認識されたものではないか。秋成は、ものごころつくつかつかない頃から、數多くの喪失と不幸を體驗してきた人である。實父母との別れ、最初の養母の死去、庖瘡とその後遺症、義理の姉・養父の死、鳴屋の焼失、妻の剃髪と死去、左眼失明。全盲。次々襲ふ出來事に自己の「不遇」認識を深め、それこそ國學研究を進めつゝ古典の中にも讀込んでいった。

血かたびら

桓武帝崩御後に即位し給うた「善柔」の性の平城帝は、自身の側近と皇太弟を推す勢力との間に懊惱し給ふ。打續く怪異を目の當たりにされ讓位し給ふも、復位をもくろむ側近は叛亂を企て、仲成は斬首、藥子は自害、自らも剃髪し給うた。

藥子、おのれが罪はくやまずして、怨氣ほむらなし、つひに刃に付して死ぬ。この血の帳かたびらに飛び走りそそぎて、ぬれぬれと乾かず。たけき若者は弓に射れどもなびかず、劍にうてば刃切れこぼれて、ただおそろしきのみまさりしとなるん。

（『日本紀略には、「遂に藥を仰ぎて死す」とあり。「血からびら」は藥子の怨念を具象化するための用意か。）

上皇には、かたくしろしめさる事なれど、ただ、「あやまりつ」とて、御みづからおぼし立ちて、みぐしおろし、御齡五十二といふまで、世にはおはせしとなん、史にしるしたりける。

（平城上皇は、藥子の奸計を知らず奈良へ都を遷さうとし給ふた。に重祚の

十月（詳細未定）

研究課題 『飛騨匠物語』石川雅望著

十一月（詳細未定）

研究課題 『近江縣物語』

十二月（詳細未定）

研究討論『研究課題の纏めと討論と』令和四年の研究課題について

三、催物案内

- ・三の丸尚藏館 第八十八回展覽會 「近代陶磁をふりかへる―明治・大正・昭和初期」六月八日（火）ゝ九月五日（日）
- ・國立博物館 特別展「國寶 鳥獸戲畫のすべて」令和三年四月十三日（火）ゝ六月三十日（日）
- （豫告）聖德太子千四百年遠忌記念「聖德太子と法隆寺」七月十三日（火）ゝ九月五日（日）

思召があつたともいはれるが、真相はわかつてゐない。）

天津をとめ

仁明帝の寵臣良峰宗貞は、色好みの男であつたが、これを輕薄として憎む人もあり、帝の死後朝廷から姿を消す。小町との歌の贈答をきつけとして、仁明皇太后に搜し出されて朝廷に戻り、後には僧正位まで昇つた。

「嗟乎、受禪廢立のあしきためしは、もろこしの文に見えて、これにならばせ給ふよ」とて、憎む人多かりけり。

（聖賢から聖賢へと帝位が譲られたり受取られたりするのをよしとする、儒家的革命思想にもとづく惡例。いはゆる萬世一系を自然な形で保持するのがわが國本來の國柄といふべきであるとする秋成の、國學的見地。）

海賊

土佐から歸る紀貫之に舟上で對面を請うた海賊は、『古事記』につき貫之を難じ、また三善清行『意見封事』について一方的にまくし立てて去つていく。貫之歸京後も、海賊は菅相公論を投込んでいくが、この海賊こそ、放蕩亂行ゆる朝廷を逐はれた文屋秋津であつた。

我は、詩つくり歌をよまざれど、文よむ事を好みて、人にほこり、にくまれ、つひに酒のみだれに罪をかうぶり、追ひやはれし後は、海にうかび、わたらひす。

二世の縁

土中から掘出された入定者が人々の介抱で蘇生する。男には、前世の高僧の面影は全くなく、入定の定助と呼ばれ、やがて町のやめめと一緒にになり、荷擔ぎで世を渡る。村人の中には、それまで信じてゐた佛教を迷妄として捨てるものもあつた。

「何にこのかひがひしからぬ男を、また持たる。落穂拾ひて、ひとり住めりにてありし時戀し。また、先の男、今ひとたび出で歸り來よ。」

目ひとつの神

和歌修行を志す東國の若者が、上京の途中老曾の森で野宿すると、

一つ目の神や神人・修驗・僧・狐らの酒宴に出會ふ。若者も宴に呼出され、都で師につくことの無用を諭され、空を飛んで東國へ向ふ修驗に連れられて歸つていつた。

この夜の事は、神人が百年を生き延びて、日なみの手習ひしたるに、書きしるしたるがありき。

『膽大小心録』に「近ごろ目くらく、老にいたりてただ字とも何とも思はずして、心にまかせて筆を走らす」とあり。秋成自身の投影があるか。）

死首の咲顔

五曾次の息子五藏は、同族元助の妹宗と戀仲になる。五曾次は結婚を許さず、宗は病にかかり、やがて危篤となる。五藏は、元助と相談し、宗に嫁入りをさせて我家に迎へるが、五曾次は許さず、元助はその場で宗の首を切り落した。

（文化三年、四月十七日、秋成（七十三歳）は、一乗寺の圓光寺に隣人春朔らと參詣した。そこで、渡邊源太に邂逅した。若い頃、妹の縁談のもつれからその妹を切つたといふ話題の人である。秋成は、この邂逅を契機に、一氣に「ますらを物語」を書き上げ、やがれそれが『春雨物語』の「死首のゑがほへ」と變容する。）

捨石丸

陸奥の長者に仕へる大男捨石丸は、主殺しの濡れ衣をさせられ、江戸へ逃げ相撲取になる。豊前國主に抱へられるが、病で足が立たなくなり、長者追善のため豊前の難所に隧道を通すことを決意する。捨石丸を追つてきた長者の子も、その志を知り協力する。業成り、捨石丸は死後捨石明神と崇められた。

捨石は、ほどなく死にたれば、捨石明神とあがめられて、岩穴の口に祠建てて、國中の民仰ぎ祀る。

（實説によれば、捨石丸のモデル禪海は、安永三年八月、八十八歳で他界したといふ。この部分は秋成の創作であらう。）

宮木が塚

もと貴族の子で騙されて身を賣られた神崎の遊女宮木は、十太兵衛

と相愛の仲になるが、横戀慕する惣太夫は十太兵衛を毒殺し、宮木と枕を並べる。やがて眞相を悟つた宮木は、土佐配流の途中立ち寄つた法然上人に念佛を授けられ、海に入水して果てた。

上人見おこせ給ひて、「いまは命捨つべく思ひ定めたるよ。いとかしき賤の女なり」とて、舟のへに立ち出でたまひ、御聲清く、念佛高らかに十度なん授けさせ給ひぬ。これをつつしみに口に答へ申し終り、やがて水に落ち入りたりき。

歌のほまれ

『萬葉集』の「和歌の浦に汐みちくればかたを無みあし邊をさしてたづ鳴わたる」といふ赤人の歌が、聖武帝や黒人やよみ人しらずの歌に類似してゐるのは、昔の人が思ふままを素直に歌つたからで、これこそがまことの歌の路である。

いにしへは人の心直くて、見るまさめをば、人やいふとも問ひ聞かでなんよんどりける。さらば、歌よむはおのが心のまま、また、浦山のたたずまひ・花鳥の色音、さかしくいひたるものにはあらず。これをなんまことの歌とはいふべけれ。

樊かい

伯耆に住む大力の大藏は、家の金を盗み、父や兄を殺してしまふ。逃亡中に唐人がつけた「樊かい」のあだ名を名乗り、盗人の一味に加はつて、悪事の限りを盡す。ある時、殺生石で僧の金を奪ふが、戻つた僧は、出し残したのは我ながら心清からずと、金を再び樊かいに與へた。樊かいは心改まり出家して、後には陸奥の寺の大和尚となり遷化した。

「心納むれば誰も佛心あり。放てば妖魔」とはこの樊かいなりけり。（大藏のおもかげや舉動、あるいは話の展開の上に、秋成が若い頃から愛讀したらしい『水滸傳』の登場人物の一人魯達（智深・花山和尚）の像が強く影を落してゐることが指摘されてゐる。）

支那、漢の高祖劉邦（りゅうほう）の功臣。沛（はい）の人。紀元前二〇六年、楚王項羽（こうう）と劉邦とが鴻門に會した際、謀殺されそうになつた劉邦を機転をもつて脱出させた。のち、劉邦が漢王になると將軍になり功をなした。前一八九年没

秋成の人物

京にて今の人物は皆川文藏と上田餘齋のみ。餘齋は浪花の人也京に隱居す。しかれども文藏は徳行ならざるよし聞ゆ。秋成は世をいとうて人とまじはらず。（瀧澤馬琴著『羈旅漫録』八十五）

馬琴は、京都に於て、つてを求めて秋成とも會つて見たく思ひながら、橋本經亮あたりから人間が狷介で、人と交らぬといふことを聞いて、往訪を斷念したのではあるまいか。『羈旅漫録』の記載は、私にはさやうに解釋せられて來る。しかし秋成と馬琴と、この二人のむづかし屋が一座したとしても、そこに快談が湧いたであらうなどとは考へにくい。（森銑三全集第三卷「上田秋成雜記」）

むか人のいへる、國を去、うからやからにうとまれ、家わざをせず、遊びてかへらざるは何人ぞや、是を狂蕩の人と云。また才にほこり、名をひびかさんことをのみつとめ、おのれを如何なりともかへり見ぬは、何人ぞや。是を智謀の人と云。此ふたつともともに道を失ふとや。翁此ふたつをのがれず。さればみじかき才に苦しまんよりは、狂蕩の人と呼ばれて遊ばん。（上田秋成著『よもつ文』）